

珈琲の思い出

# 散 歩

和樹の行きつけの美容室の前を通る。

カット1380円也。

そつと中を覗いてみる。

どの女が和樹の髪を切っているのだろう。

和樹はどんな顔をして、自分の髪を触らせているのだろう。

無害そうに見える、あのはにかんだような笑みを浮かべているのだろうか。

私がイクたびに、和樹の後頭部の髪をくしゃくしゃにした、あの感触を思い出したりしているだろうか。

ごわごわした、白髪交じりの髪を

この手のひらが、この指先が  
覚えてる。

そんなことを思い出しながら、一人商店街を歩く。

鈴木優子